



看護師として

【東京都】池田 幸生 いけだ ゆきお
58歳

私は、自衛官として30数年間を

勤務して来ましたが、その間に東日本大震災を経験しました。その当時、学校教官として看護師のク

ラスを受け持っていました。教え子の一人は、学校を卒業して仙台に勤務になりましたが、そのときに東日本大震災が起きました。

当時彼女は、自衛隊病院に勤務しておりました。夜勤明けで自宅に小学校1年の息子といたところを被災しました。ガラスが割れ、食器が落ち、壁にヒビが入り、電気、ガス、水道が止まりました。

泣きわめく息子をなだめている時に、病院から非常呼集の連絡がありました。病院に出勤する要請でした。彼女が着替えていると、息子が足にしがみ付いて来まし

た。

「お母さん！ お母さん！ 行かないで！ 行かないで！ 1人にならないで!!」と泣きじゃくりま

す。普段はこんなに泣く子ではないのに……。

「お母さんは看護師で、自衛官なの。だからどうしても行かないといけない。皆を助けなきゃいけないの!」

何度も何度も息子に説明しているうちに、自分でも涙が止まらなくなりました。

「自分の息子さえ守れないのに、他人が守れるの?」。そんな言葉さえ浮かびました。

それでも! それでも! 歯を食いしばって、彼女は息子に言い

聞かせました。

「人を助けるのがお母さんの使命なのよ! あなたも自衛官の息子で、看護師の息子でしょう! 理解しなさい! 耐えなさい!」

息子は体を振るわせて、涙を流しながら、返事をしたそうです。

「うん……。分かった。僕、待ってるよ……」

あれから8年が過ぎました。「そんなことあったっけ?」

息子はこの話をする、上の空で、彼女の顔を見るそうです。

